

夏目漱石の明治 40 年 3 月末京洛滞在地について
一田中周友先生御旧邸をめぐって

経 薫

夏目漱石(1867~1916)の明治 40(1907)年 3 月 28 日から 4 月 11 日まで 15 日間の上洛については、一切の教職を離れて新聞界に投ずる重要な時期の狭間に当たったため、これまで多くの論者がこれに言及してきたが、併せて、その時漱石が滞在した当時の京都府愛宕郡下鴨村 24 番地(すなわち夏目漱石「京に着ける夕」『大阪朝日新聞』明治 40 年 4 月 9 日~11 日)の舞台)の狩野亨吉(1865~1942)の借家についても、多年関心が寄せられていた。ただ、これは、昭和 62(1987)年 10 月 29 日の『毎日新聞』夕刊 [補註 正しくは同大阪本社版] が京都市左京区下鴨森本町 24 番地・京都大学名誉教授田中周友先生(かねとも、1900~1996、著名なローマ法学者)宅(以下「田中周友先生旧邸」。)であることを、江藤 淳氏(1933~1999)のコメント付きで報じたことから、それで、一応けりが着いたと思われていた。しかるに、最近本件を再検討するうちに、近年これについて別のような見解が出ていることが判明したので、この経緯を少しく調べてみた。詳細は他日に譲るが、要旨は次のとおりである。

上記『毎日新聞』の記事によれば、田中家に同家と狩野亨吉との建家借用証書及び狩野の入居を伝える田中周友先生御母堂雪枝様の日記が残されているとのこと、ある識者が現地を実査し漱石「京に着ける夕べ」での方向感覚を確認し得たこと等 [補註 同氏はその後平成 23 年 2 月に再踏査し、再検討された由] から、当時の下鴨村 24 番地は上記田中周友先生旧邸と考えるべきである。

ほぼ田中周友先生旧邸と思われていた本件が、確定できずに現在に至った要因としては、① 上記『毎日新聞』の記事が、何故か学界に周知されず、漱石専門家が知り得ていないこと(本記事は京都版 [補註 正しくは大阪本社版] のみ掲載だったのか。このあたりは残念ながら不明。)。② 『毎日新聞』の記事にコメントした江藤 淳氏が何故かその後の著書(例えば『漱石とその時代』第四部(新潮社、平成 8 年 10 月 26 日刊) 10 頁)で触れなかったことが挙げられ、この説明がまず当面の課題であろう。(平成 19 年 4 月 3 日稿)

(経 薫「夏目漱石の明治 40 年 3 月末京洛滞在地について一田中周友先生御旧邸をめぐって」『国語教育』第 27 巻第 6 号(通巻第 326 号、東京法令出版(株)、平成 19 年 8 月 1 日刊)103 頁「情報ファイル」) (補註)本 HP 別稿「田中周友先生御旧邸と夏目漱石滞在関係『毎日新聞』各版記事比較対照表」
<<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/mainichi871029.pdf>> 参照。「昭和 62(1987)年 10 月 29 日『毎日新聞』夕刊」とは、昭和 62 年 10 月 29 日(木)『毎日新聞』(夕刊)大阪本社版夕? 版及び夕 4 版のこと(補註平成 23 年 9 月 6 日追加)。